永久の覇者　カイン

亜紀内　司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永久の覇者　カイン

【Ｎコード】
Ｎ９６２６Ｙ

【作者名】
亜紀内　司

【あらすじ】
『私の全てを賭けにして――――――　この世界を守ると誓おう』
遥か昔、人魚がまだ生きていた頃――――魔王、という存在は自ら命を絶った。
正確に言えば２０００年後の未来に転生した。自らの魔力と記憶を封じて。これはその魔王が転生した後、カインという青年になり、成長していく（していくか…？）お話です＊

コメディを多めにしたいですが、シリアスももちろんありますｂ

個人的には魔王&勇者&賢者の組み合わせって凄い愛していたりｗｗ
あと魔性の女…じゃなかった魔女！！
魔女がいなきゃっ（（
吸血鬼もいいですね……幼女ならなおｓ（（殴

望みは全て―――（前書き）

魔王……魔王って響き素敵だと思いませんｋ（（殴

望みは全て――――

それはいつから始まっただろう？

望んでいなかったそれは、彼の知らない間に起こった。

信頼していた者に裏切られる時の胸の痛み、人を殺す時のあの罪悪感――――――。

全て全て全て…！！！！！

あれの所為だと言うのに――――――！！！！

あぁ……早くこの世界から消えてしまいたい。

そうすれば、そうすればきっと――――――

この胸の中にあるものの正体が分かる気がする。

今まで自らを転生させる度、前世の記憶を持たせようかどうか迷い、結局残しておいた。

――――――しかし…

もしもその記憶全てを私自身の中に封印すれば、もしかしたら未来は変わるのでは…？

――――あぁ、親愛なる最愛の友よ…君に託そう。

私の命を。

私の全てを賭けにして――――――

この世界を守ると誓おう。

望みは全て―――（後書き）

中途半端な終わり方で申し訳ない；；；

評価や感想など求む！です＊と言ってもまだ全く進んでいませんが

…

青年と黒猫　？（前書き）

いきなり傭兵たちが逃げている場面から始まります。

多分、何故逃げたかの詳細は次の話で出すかと…。

青年と黒猫　？

「ただの傭兵である貴様等を助ける義理などないだろう？」

我先に、と逃げていく兵の中、救護室で怪我の治療をしていた傭兵――サルジアが助けを求めた時、彼の指揮官は冷たくそう言い放った。

その光景を横目で見ながら、速やかにその場から退却していく同士たち。

サルジアは彼等に視線を向けるも、誰一人として助けようとしない。

「……」

彼が絶望した時だった。

「おいおい、我等が指揮官様は冷てぇなぁ…？」

そう言いながら、逃げていく傭兵を押しのけ、彼の前に現われたのは…

「カイン……」

サルジアは目の前に現われた自らの友人を呆けた顔で見つめた。

「あの指揮官様はどっかの没落した貴族出のご立派な奴らしいから、

そんな事が言えるだけさ」

わざとらしく大きな声でそう言って、パチリ、とウィンクする。

……このタイミングでは絶対言えないが、上手いとは思えなかった。

「というかお前、いつの間に左腕怪我してたんだよ」

そう言いながら包帯でかなりきつく巻かれた上に血が滲み出ている彼の腕を、ことも何気に叩くカイン。

「っ――――！！ってぇよっ！！！！！」

苦笑いして軽口を叩く彼だが、尋常でない痛みらしく、大量の汗が噴き出していた。

「あーこりゃあかなりの重症だな」

ははは、と笑うカインを恨めしそうにサルジアは睨んだ。

「お前なぁ…」

「それより、サルジア」

急に真顔になる。

「助かりたい、よな？」

何故そんな分かりきった質問をするのか、彼は聞かなかった。

カインは意味の無いことはしない。

それを知っていたからだ。

「もちろん」

即答した。

それを聞くと彼の表情がいたずらっ子の少年のようなものになる。

彼は辺りを見渡し自分達しかいないことを確認すると急に救護室の棚に視線を向けた。

「……もういいぞ、出て来い、ノアール」

は？誰だそれ

サルジアが言うよりも先に手入れの行き届いた美しい毛並みを持つ黒猫が彼等の前に飛び出した。

『やっと私の出番ですね、カイン様』

猫は流暢な人の言葉でそう言うと、ふとサルジアに視線を向ける。

『……その方は？』

「俺の友人だ。……絶対に裏切らない、な」

一瞬彼の瞳に影が差した気がしたが、すぐまたいつもの生意気な光を宿す。

『———分かりました。カイン様が言うなら信じましょう』

黒猫はそういうと何か呟いた。

その途端、彼等を囲うように青白い光を放った魔方陣が現われた。

「？！」

サルジアは呆然とする。

魔術方面で雇われた傭兵である彼には分かる。

――――コレはかなり難度が高い、高等魔術の魔方陣だという事を。

こんな猫が？！

「ほら、サルジア。肩貸すぞ」

ニッ、と笑いながら魔方陣の中央に立つカイン。

今はその笑顔が、とても心強く思える。

『空間を捻じ曲げて移動いたしますので、たまに酔う方もいらっしゃいます。お気をつけ下さい』

誰にともなくそう言った黒猫は視線を自分よりも遥か上にあるカインの顔に向ける。

「了解、了解。魔術とかよく分かんねぇけど、よろしく頼むわ」

彼がそう言った途端、その場の景色が、崩れた。

青年と黒猫　？（後書き）

いきなりな始まり方でスミマセン；；；

次の話でいろいろ状況理解できるようにする…予定です☆（（

青年と黒猫　？（前書き）

ちょっとした回想&ちょっとした展開な3話目＊

ちょっとずつ読んでくださる方が増えればと思ってます☆ミ（（殴

青年と黒猫　？

この世界の東に位置するアノテマリア大陸。

その大陸の最南端にある小国ミラリスと、その隣の小国グレイシーは昔から相容れなかった。

隣国なので形だけは同盟を組んでいるが、お互い目を光らせ、いつボロを出すかずっと様子を伺っている。そしてそれを理由に戦争を起こし、さっさと自らの国に従わせようという魂胆だ。

そして先月、ついにグレイシーの『裏切り』と取れる行動をミラリスが目敏く嗅ぎつけた。

それはグレイシーが、大国スノローランとひそかに同盟を組もうとしている、という物だった。

元々、相容れない両国が同盟を組んだ最大の理由がスノローランの政策に抵抗する為だ。

しかしグレイシーの王はこれ以上スノローランに抵抗すれば、自らの国が危ないと悟り、スノローランに同盟の話を持ちかけた。

それを嗅ぎつけたミラリスの王は出兵をし、グレイシーとの戦争が始まった――――――。

しかし、ミラリスの王はある誤算をしていた。

それは、彼が戦争を始めたとき、もう既にグレイシーはスノロー

ランと同盟を組んでいた、ということだ。

つまり、兵や経済面など全てにおいて、ミラリスは劣っていた。

しかもスノローランの魔術部隊の中には有能な幻術師がいたらしく、ミラリスの兵は混乱に陥った。

理由は簡単。

二角獣（バイコーン）や不死鳥（フェニックス）、一角獣（ユニコーン）……しまいにはワイバーンなど、幻の生物と謳われるものを戦場に持ち込むスノローランに恐怖を覚えないものはいないだろう。

――――――幻術とは露知らず。

恐怖という名の思いが彼等ミラリスの兵の中に生まれた途端、ミラリスの兵の戦意は喪失した。

そして同時に、我先に、と敵に背を向け戦場からの逃走を図ったのだ。

☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆

「……にしてもこれからどうすっか～」

先程まで戦場で血を浴びていた者とは思えない緊張感のないカインの発言にサルジアは軽くため息をついた。

「いや…どうすっかって…。とりあえず、陛下に会いに行こう」

「……そうだな。どうせ目の前に城はあるし」

二人は同時に同じ方向に視線をめぐらせる。

黒猫、ノアールのおかげで戦場を切り抜けて来た彼等が空間移動で着いた先は、ミラリスの城の真ん前だった。

『……カイン様はこの国の王がお嫌いでいらっしゃるのですね』

ノアールはそう呟くと『カイン様が望むのであれば今すぐ消しますが…』と恐ろしいことを言い始めた。

「いやいやいやいや！ダメだろ！！！…あ、いや……ダメ、です。うん。一応であってもこの国の…国…王…」

ミラリスが急に敬語になったのはノアールにギロリと睨まれたからだ。

なにこの猫、すげぇ怖ぇ…。殺気が…さっきからずっと背中に……。

そんな事をサルジアが思っていると急にカインが真面目な顔になり、呟き始めた。

「あいにく、戦争に殆どの兵が参戦してたから、この城の警備は今、とても薄い。侵入して王を脅して、無理矢理報酬を要求すんなら今のうち……」

「いや、ちゃんとあった事を全部話してから報酬貰おうぜ。平和的に解決…」

「あぁ…でもそうか…。あの糞爺（くそじじい）にはいつもなんかやたら強そうな

姉ちゃんがいるんだっけ…」
「ちょ、仮にも一国の王を糞爺呼ばわりってな…」
「いや…でも相手は女…。ちょっと強引でも突破は出来ないこともない…」
「お前、如何わしい事考えてねぇよな？」
『カイン様に限って、それはありません』
ノアールに間髪入れず突っ込まれた。
相変わらず友人は考えに没頭するあまりサルジアの言葉自体耳に入っていなかったようだが。
難しそうな顔をしながら、言っていることは無茶苦茶だった。

しばらくサルジアがノアールの殺気のこもった視線に耐えていると急にカインが声を張り上げた。
「…よし、決めたっ！！！……ってあれ？どうしたサルジア。なんか引き攣ってるぞ」
思考の海に浸っていたカインが現実に戻ってきたらしい。

「…いや…別に…」

実際は、ノアールに傷口を噛まれ、痛みに悶絶していたのだが、それを言ったら殺されるだろう……猫に。

「……そうか。まぁいいや」

（よくねぇっ！）
心中で突っ込みつつ、ノアールの目が光っている今は絶対に口を滑らせたりしない事を自らの心に固く誓う。

「じゃあとりあえず、侵入しますかね、城に」

「は、本気で侵入する気だったのか？！」

確かに彼ならやりかねない事だが……。

「いや、だって門番がいないんじゃ、取り次ぐとか無理だろ」

残念なことに正論だった。

『流石です、カイン様。一生ついていきます』

ノアールがとても嬉しそうに言った。

……結局この猫はなんなんだ……。

「はぁ……まぁしょうがないな…。明日からの生活費とか困ってるし」

苦笑しながら、自らの妹と弟を思い出す。

「じゃっ、そーゆーことで」

カインは目をらんらんと輝かせながら、城への侵入を開始した。

青年と黒猫　？（後書き）

gdgdモード突入っ！ですね＊

ちょこっとこの場を借りてこの小説をお気に入りして下さった方にお礼を（見てくれているでしょうか）。本当に、ありがとうございます＊どなたがお気に入り入れてくれたのか分からないのが残念ですが……。はじめて小説をお気に入りして下さった方がいたので嬉しいですっ！！

では、では、よろしければ次の４話もよろしくお願いします＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9626y/

永久の覇者　カイン

2011年11月30日20時48分発行